『ちくま評論選』解説

26 「後の祭り」を祈る――過去は物語り

大森荘蔵

■凡例　1　①②…は形式段落番号。◆は、設問。　2　▽は、本文の追跡・分析。
3　▼は、読解に関する技法。　4　☆は、記述に関する技法。

■前提　哲学的思考がテーマ。哲学は、常識的に当然と思っていることがらについて、その根底を問おうとする、反省的な思考である。「ある」とは？とか、「わかる」とは？とかいう問いだ。「私」とは？　「死」とは？　「歴史」とは？　…今回のテーマは「過去」とは？　カントも出てくるし、「倫理」の知識も役立つかも知れない。かといって、知らないから解けないというわけでもない。でも、「ア・プリオリ」「パラドックス」といった、おなじみの「現キー」用語で引っかかっていてはダメだ。

■追跡

①　英米哲学界では有名なマイケル・ダメットの「酋長の踊り」という謎解きがある。ある部族で青年が成人するにはライオン狩りでその力を証明せねばならないので、狩り場に二日かけて行き、狩りの後二日かけてもどる。酋長は彼らの成功を祈ってその間踊り続けるが、問題は、狩りが終わった日から青年たちが帰路にある間も踊り続けるというのである。そのとき狩りはすでに終わって事の成否は定まっているのに、その幸運を祈るとはどうしてだ、というのが**【読解問題1】**ダメットの問いである。われわれ現代人もこの酋長を笑えないだろう。列車や飛行機の事故の報を聞いた後でそれに乗り合わせた家族の無事を祈り、入学試験の合否はすでに決定済みであることを承知しつつ、なお一縷の望みをかけて祈りはしないだろうか。

▽筆者の問いの前に、まず、「ダメットの問い」。時間的に、そのときにはすでに事の成り行きは決定している、つまり、客観的には事実はすでに定まっている。自分がそれを知らないだけ。なのに、人は、まるでまだ、その事実が変更可能であるかのようにふるまう。それはなぜ？

②　しかし、すでに決定済みの過去をいまさら変更しようなどとは誰も思っていはしない。明らかにあの酋長にもわれわれ東京に住む人間にも、過去はまだ決定していない、そして望ましい過去であることを祈る余地、不幸な過去であることを恐れる余地がまだある、こうした思いが心の底にあるのだと私は言いたい。

▽あからさまに「規定の過去を変更したい？」と聞かれると、それは無理、と言うだろう。しかし、心の底には「望ましき過去であってほしい／不幸な過去であってほしくない」と思う余地＝過去はまだ決定していない、という思いは生きている。だから祈ってしまう。筆者はそういう。

③　◆1それ（とは？）はわれわれが堅持していると思っている「決定済みの過去の実在」という信念に走った一筋の亀裂ではあるまいか。この信念の底には、現在からは手がもう届かない「過去自体（とは？）」という人類に染みついた思いがあると思う。そしてこの◆2「過去自体」という考えこそ、カントが徹底的に批判したあの「物自体（Ding an sich）」の考えそのものか、少なくともその同類近縁のものである。カントの批判に同意する現代の人々は、当然「過去自体」の考えをも批判すべきなのに、これまでそれを怠ってきた。その油断の隙をついてライオン狩りの起こす地震にひとたまりもなく「過去自体」という見かけ倒しの高層ビルに亀裂が入ったのである。では**【読解問題2】**このビルを撤去した後にどんなバラックが建てられるのか。

▽筆者の問い。〈このビル＝過去自体〉を否定した後にどんな考えが成り立つのか。われわれは、「決定済みの過去というものが実在する」という信念をもっている。○○高校に合格したという過去、○○ちゃんに振られたという過去、それらは変えられない過去として実在している。…とわれわれは思っている。それらは変えられない＝「現在からは手がもう届かない」。現在とは切り離され、自分たちがもうどうあがいても変えられない「過去」を「過去自体」とここでは呼んでいる。

それはどうも、カント（倫理選択者はおなじみ）が批判した「物自体」の親戚みたいなもので、物自体を批判するなら過去自体も批判！と筆者は言っている。

◆問1「それ」とは？

図式的に見よう。「それ」＝「決定済みの過去の実在」という信念に走った一筋の亀裂。過去は決定済み、という信念に、亀裂が走るって？　過去は決定済み、という信念が揺らぐってことかな。そう、過去はまだ決定していないのでは？という思いがどこかで蠢いている。それが事が決定しているはずの時点での「祈り」といった行為につながる。「決定済みの過去の実在」という信念と「決定済みであることを承知しつつ、なお一縷の望みかけて祈る」という行為は、対立し、矛盾している。これが亀裂。

【解答例】「私たちの心の底に、過去はまだ決定しておらず、望ましき過去であってほしい、とか、不幸な過去であってほしくないと祈る余地がまだあるという思いが生きているということ。」

◆問2「過去自体」とは？

「現在からは手がもう届かない「過去自体」」という部分しか手がかりがない。あとは、「決定済みの過去の実在という信念」。くっつければ、「決定済みの過去の実在という信念」の底にある「現在からは手がもう届かない「過去自体」」。噛み砕こう。過去は、を主語に立てて、「過去は現在からは手がもう届かないという考え」。これがベース。

（解答例）「過去は、すでに決定しており、現在からは手が届かないものとして実在しているという考え。」

「物自体」の補足。われわれは何かを経験する。何かを見る、とか。今教科書の字を見ているが、ぼくは老眼なので、ちょっと見えにくい。なんだか、ぼんわりしている。で、老眼鏡をかける、見えた。「鬱」という字か。さっきは「■」にしかみえなかったけど。その経験（字を読む）を生み出す元になる字という物（インクのシミ）はある。なければ何も見えない。でも、見え方は違う。僕と彼女でも違うだろう。われわれは、感覚によって経験し、知る。その感覚の元になるのが「物自体」だ。何らかの印刷された記号はあるのだろう。しかしその「物自体」は経験することができない。人間が認識しているのは現象（一つの像）であって、現象の背後にある物自体ではない。物自体そのものは認識できない。人間は対象そのもの（物自体）をそのまま受けとるのではなく、もともと自分に備わっている枠組み（空間と時間という形式）にあてはめて対象の「像」を（メガネなんかの助けも借りつつ）受けとる。

カントが批判したというのは、「像」を「物自体」と混同することである。われわれには物の「像」しか見えない。「物自体」を認識しているというのは思い違いだ――この考えを過去の話に応用すると、「過去自体」が実在しているというのは思い違いだ、認識しているのは過去の「像」にすぎない、となるのかどうか。

④　それは私たち人類がその実生活のなかで旧石器のころから営々と実践してきた道を再確認することである。その道の最終段階で「過去自体」や「物自体」の妄想に取りつかれたのだから、この妄想段階をカットしたそこに至る道を確認してそれを再興する、それが私の提案する戦略である。

▽〈「それ」＝「過去自体」や「物自体」を否定すること〉を提案したい。なぜなら、「過去自体」や「物自体」は妄想だから。「過去自体」や「物自体」を否定することによって、「人類が実生活のなかで営々と実践してきた（ほんとうの）道」が見えてくる――。

⑤　さて、◆**3**過去とはどんなことか、過去とはそもそも何なのか、その過去の意味を体験的に教える根幹が想起経験であることを疑う人はいない。想起こそ過去についての唯一の基底的情報源であることは今も昔も変らない。過去とは想起によって思い出されるアネクドートの断片を接続して織ってゆく過去物語りにほかならない。しかし人類はこの情報源が人によって食い違う、必ずしも信頼できないものであることを痛いほど経験してきたはずである。そこで当然、各人の過去情報をスクリーンする◆**4**公定の手続きをあみ出した。その手続きが長年月にわたる生活のなかでの実践的適用によって修正改善されてきた結果が、現在の法廷や歴史研究、そしてマスコミ報道のなかで社会的に合意され実施されている真理条件として、誰にも十分熟知されている。その基本は、複数の人間の想起の一致（証言の一致、ウラを取る）と現在世界への整合的接続（物証や自然法則）である。その具体的内容は裁判所や刑事部屋、それに宇宙論や進化論の学会や教室をのぞけば、そこで毎日展開しているのが見られるだろう。

▽◆**問3**「過去」とは？

そもそも過去とは何か。▼とは＝定義文。この「とは」を、少し後まで検索する。⑤段落「過去とは想起によって思い出される小話の断片を接続して織ってゆく過去物語り」。⑥段落「過去と呼ばれているものは制度化され公式化された過去物語り」。⑧段落「過去とは真理条件に沿って制作される過去物語り」。

⑤段落の定義だけでは、「必ずしも信頼できない過去」になってしまう。だから、「真理条件」に沿うものだけが過去と認定される。しかし、次の⑥段落にあるように、その真理条件自体が、人間社会の制作物である。⑤段落の定義だけではまずいが、さて、どこまで書くか。「真理条件」の説明は、問4で聞かれているので、とりあえず、こんなんでいかが？（もちろん、真理条件の説明を入れてもいいが）

（解答例）「過去とは、想起によることがらの断片から、真理条件に従って制作する物語。」

◆**問4**「公定の手続き」とは？

解答のぶれが予想される。一つは、何のための手続きか、に答えようとするもの。もう一つは、その手続き自体の内容を答えようとするもの。こういうときは、どちらにも答えておけばいい。

「何のため」は、**☆傍線部を延長**し、「前」を見る。各人の過去情報は、必ずしも信頼できないので、各人の過去情報をふるいにかけるための手続き。

その内容は、「複数の人間の想起の一致（証言の一致、ウラを取る）と現在世界への整合的接続（物証や自然法則）」。

（解答例）「各人の過去情報は、必ずしも信頼できないので、複数の人間の想起が一致するか、現在の世界と整合的に接続しているか、点検することによって、誰もが認める過去を認定する作業。」

⑥　だがこの真理条件は、最終氷河期の時代の獲物や異性をめぐっての争いや、去年の種まきや収穫についての論争の場で適用されていたものと全く同一の条件であり、その連綿と続行されてきたものである。つまり、過去物語りの真理条件は（数学や自然科学の真理条件と同様に）歴史的社会的制度なのである。「真理」はア・プリオリに天下るのではなく、人間社会の制作物なのである。過去物語りはすべて、家庭争議や犯罪捜査といった些細な事件に至るまでこの真理条件の審査を通過しなければ狭くは当事者たち、広くは社会一般の公認を受けられず、過去として公式の登録をされないのである。過去と呼ばれているものは制度化され公式化された過去物語りであることは、古事記、日本書紀の昔から少しも変わっていない。そしてよくあることだが、こうした制度的なものがあたかもわれわれ人間とは無関係にア・プリオリに実在して、ほんの時折われわれにその姿をかいまみさせる、といった錯覚を生むのである。**【読解問題3】**それが物自体とか過去自体といった妄想にほかならない。

⑦　過去自体とはカントが強調したように、物自体と同様に経験的には考えることができず、したがって想像することもできない、それゆえただ妄想することができるだけのものである。

⑧　ありていに言えば、過去とは真理条件に沿って制作される過去物語りにほかならない。

▽キーワードは、「制度」「制作物」。特に「制度」は、『現キー』も参照。

「獲物や異性をめぐっての争いや、去年の種まきや収穫についての論争」でも、「みんなはどう言ってる？」とか「証拠はあるか？」とか言っていたに違いない。つまり、「ほんとうのこと」は、話し合いの結果、「これが真実やな」と認定されてきた。裁判もそうですね。「歴史的社会的」というのは、人間社会によって制作される、ということだ。人間たちの都合によって、といってもいい。これと対立するのが、「人間とは無関係にア・プリオリに真理が実在する」というもの。（挿入されている、数学や自然科学については、人間とは無関係な、ア・プリオリな真理なんちゃうの？と思った人がいるだろう。違います。数学も科学も、人間の都合による「真理」です。ここではそのことについては論じられていないし、説明するゆとりはないけれど。『現キー』「科学」参照。）

筆者の結論。過去とは、人間社会の制作物。これを直観的に（具体的に）捉えるなら、裁判の判決を思い浮かべるといい。証言、証拠に基づいて、あれこれと議論し、判決が下る。「これがこの事件（過去）の真相だ。」しかしその「過去」は、人間とは無関係にア・プリオリに実在する「過去自体」ではない。

時折、「冤罪」が発生する。ＤＮＡ鑑定（別の証拠）の結果、「事実」とされてきたことが否定される。過去（とされたもの）と現在（鑑定結果）の整合性が崩れる。一度認定された「過去」はなかったことにされ、被告人は無罪となる。このように「過去」は制作され、制作されるものであるから、誤る可能性を持つ。

しかし、それでもそのとき、「では、『真犯人』は誰？　事実は何？」とわれわれは思う。そのとき要請されているのが、「過去自体」だ。われわれは、そう思ってしま

う。しかし、人間の思惑と切り離された純粋な「過去自体」といったものは「経験的には考えることができず、したがって想像することもできない」。「過去自体」があった、と思ってしまうが、それは錯覚だ。筆者はそう言う。

⑨　初めに述べたダメットの酋長が、すでに過去になっているライオン狩りの成功をいま祈るのは、過去自体という錯覚のもとでは確かに◆5パラドックス(ふくぶん)である。しかし、そのライオン狩りはその時点ではまだ公認された過去物語りにはなっていないのである。つまり、まだ過去ではないのである。だから好意的な酋長が祈っているのは、ライオン狩りの成功が真理条件をパスして、公認公定の過去となって部族全員に受け入れられることなのである。そこには酋長の善意と好意こそあれ、パラドックスじみたものは何もない。

▽「今」から見て「ライオン狩り」という「過去」があった。それは、人間の思惑と切り離された純粋な「過去」であり、成功か失敗かという事実も、人間の思惑とは関係なく、すでに確定している。そう考えるのは、「過去自体」を想定する錯覚だと筆者は言う。

「過去自体」とは別の考え方＝過去とは、人間社会の制作物、という考え方に立てば、「ライオン狩り」という過去はまだ「制作」されていない。「ライオン狩り」の成否はまだ決まっていない。それはいつ決まるのか。みんなが、確かに「ライオン狩り」は成功／失敗したな、と確かめ合ったときである。そのときまで、未定の事柄についての祈りは有効である。

◆5「パラドックスである」というのはなぜ？

「すでに過去になっているライオン狩りの成功をいま祈るのは、過去自体という錯覚のもとではパラドックスである」とは、どういうことか、とまず問う。「過去自体という考えに立てば、ライオン狩りの成否はすでに決まっているのに、ライオン狩りの成功をいま祈るのは意味がないということ。」

この「～なのに～」という矛盾が「パラドックス（逆説）」ということの意味だ。「逆説」を含む部分はよく問われるが、この「～なのに～」という型を使うとうまく書ける。

（解答例）「過去は人間の思惑とは関係なく確定するものだという考えに立てば、ライオン狩りの成否はすでに決まっているのに、その時点でライオン狩りの成功を祈るのは意味がないということ。」

⑩　飛行機事故を知った時点で家族が搭乗(とうじょう)していなかった（過去形）ことを願い祈るのも、いまさら◆6「後の祭り」を祈るのではなくて、家族非搭乗の過去物語りが公認されて制作されるように願い祈るのである。答案を提出した後に、合格の採点が出る物語りの公式制作をはらはらしながら待つのは受験生すべてだろう。

▽▼**具体例から理解**。「家族非搭乗の過去物語りが**公認されて制作**されるように願い祈る」「合格の採点が出る物語りの**公式制作**」が何を意味しているのか、理解しやすい。その時点では、「家族が乗っていたかどうか」「採点結果が合格に達していたかどうか」は、当事者にとって、まだその結末を知らない物語である。やがて、ニュースや合格通知やその他の証拠に基づいて、みんながそうだと認める物語が合意される。参考に、進路室でしばしば経験する例を示そう。今日の十時、○○大の合格発表。十時五分、生徒から電話。「合格しました！」。続いて、六分「合格しました！」。…というように、次々と「誰が合格したか」という過去が確定していく。ところが、受けたはずのA君から電話がない。担任は、ダメだったのか、と思う。いや、そんなはずはない。もう少ししたら、と願いを保持しつつ（はらはらしつつ）待つ。別のBさんやC君からの電話の中で、どうも、A君はダメだったみたい、という話を聞いた、という情報を、担任は聞く。みんなが、そういっている。担任は、あの（合格間違いなしのはずの）A君が、と思うが、「過去物語」は望まぬ方向へ制作されつつあるのを認めざるを得ない。受かってたら、電話があるはずだ。それがもう三時間も経つのに、連絡がない。進路部は合格者数を集計している。担任は、A君はダメだった、と報告する。…しかし、A君は合格していたのである。三日も経ってから、「興奮しすぎて忘れてました」。「アホか！」。担任は、怒鳴りつけながらも、ホッとするのであった。――これは、「仮」公認された「過去物語」が「正式」公認されるまでのタイムラグを示している。／いったん公認された過去を認めないというケースもある。「源義経はまだ生きている」「月面着陸はなかった」など。捜査や裁判、歴史修正主義（自分の都合のよいように過去を解釈すること）と呼ばれる例を見ても、過去がいかに「人間的」か、ということを思い知る。

◆6「「後の祭り」を祈る」とは？

「後の祭り」＝時機遅れで、むだなこと。「飛行機事故を知った時点で家族が搭乗していなかったことを願い祈る」のは、時機遅れで、むだだと考えるのは、過去はすでに確定しているという考えが前提にあるからである。

（解答例）「過去はすでに確定していて、もう祈ってもむだなのに、過去がまだ変更できるかのように祈ること。」

答案の作り方の基本を思いだそう。「…祈る」とは？に対しての答えは、「（このように）祈ること。」で締める。どう祈るのか、何に対して祈るのか、と自問すれば、言い回しは浮かんでくる。

⑪　これらの人間の行動と心理のすべてが指しているのは過去自体という形而上学的妄想ではなくて、過去物語り制作であることは誰の目にも明らかだろう。われわれの表の建前がかりに過去自体であっても、裏の本音は過去制作なのである。机上の形而上学的空論ではなく、実生活での行動と心情は過去制作なのである。

▽対比確認。次々と言い変えていくところは要チェック。答案作成に使う可能性あり。

⑫　昨日彼から電話があった、と思い出す想起経験で、厳然として有無を言わせぬその電話の実在性を感じるというのも、多くの人の実感であろう。しかしそれは実は錯覚なのである。それは実は、その電話は所定の真理条件をパスして必ず公式の過去物語りに編入されるに違いないという強烈な**確信**を、過去電話自体という意味不明の**妄想**で置換したのである。

▽確信と妄想。哲学の、こういった根底的(ラディカルな)な議論を理解しようとするとき、通常の理性的（常識的）発想と、それが通じないある非常識的（病的）な事態を対置してみると理解できることがある。

ある病的な状態に陥った人は、客観的にはそのような実在はない、といくら周囲が説得しても、自分の中に形成されたその実在への確信を変更することはない。「電話はなかった」とは思えない、のである。自分にとって間違いなく電話はあったのだから、誰にとっても認められる、電話があったと過去が存在した、と思いこむ。――このときは、「正常な」視点と「病的な」思い込みにズレ（電話あり／なし）があり、圧倒的に多数の「正常な」視点が、それを妄想だと断定できる。同じようなことが、通常の（正常な）想起経験でも原理的に生じているが、「電話があった」という過去についての大きなズレが問題になることはない。ないからこそ、「電話があった」という確信は、客観的事実（過去電話

自体）と認識され、疑われることもない（これを懐疑するのは、哲学者ぐらいだ（笑））。（笑）と書いたが、例えば、「神がいた」という確信と「神がいる」という実在をつなぐ問題（神の存在証明）は、神学→哲学の大問題であった。

⑬　そしてカント以後数百年を経た現在もなお、自然科学者の大部分が信じていると信じている物自体の一変型である素朴実在論についても、並行して言えるのではあるまいか。ここで一つだけは言うことができる。現在形実在論にせよ過去形実在論にせよ、実在論というのはみかけほどには丈夫なものではない。丈夫なのは人間の制作した世界物語りのほうなのである。

▽「素朴実在論」「現在形実在論」というのは、ふつうに考えるように、人間とは無関係に物が実在している、という考え方。「自然科学者の大部分が信じていると信じている」はヘンだね。「自然科学者の大部分が信じていると（私が）信じている」ということかな？

人間とは無関係に〈物や過去〉＝「世界」が実在している、という考えではなぜいけないのか？　いや、まあ、ふつうはそれでいいんです。しかし客観的な世界が実在するというのが（実はそうではないのに）、一皮むけば信念に由来するものであると、その信念がズレたときに、血みどろの争いになる可能性がある。ブッダが、われわれは世界を正しく見ていない、正しく見ることが救いへの道である、と説いたとき、〈客観的な世界の実在〉もまた迷妄の原因となることを教えていたといえる。

■読解問題

1　「ダメットの問い」に対して筆者はどのような解答を与えているか。

⑨段落参照。特に「しかし」以後を使う。

「しかし、そのライオン狩りはその時点ではまだ公認された過去物語りにはなっていないのである。つまり、まだ過去ではないのである。だから好意的な酋長が祈っているのは、ライオン狩りの成功が真理条件をパスして、公認公定の過去となって部族全員に受け入れられることなのである。」

「すでに過去になっているライオン狩りの成功をいま祈る」ということではない、という内容と対比して示そう。

【解答例】「酋長は、すでに決定済みの過去に祈っているのではなく、ライオン狩りの成功が真理条件をパスして、公認された過去物語となって部族全員に受け入れられることを祈っている。」

「真理条件」という語は、独自のものなので、ほんとうは、言い換えたい。例えば、「①証言が一致、するか、②証拠に整合性があるか、といった条件」。

2　「このビルを撤去した後にどんなバラックが建てられるのか」とはどのようなことか。

比喩の言い換え。ビル→「過去自体」という見かけ倒しの高層ビル。バラックの再建→④それは私たち人類がその実生活のなかで（旧石器のころから）営々と実践してきた道を再確認すること。これらをこのまま組み立てると、

「「過去自体」という見かけ倒しの高層ビルを撤去した後に、私たちが実生活のなかで営々と実践してきた道を再確認すると、どのような考え方ができるのか。」

まだわかりにくいので、「見かけ倒し」という比喩の言い換え、「実践してきた道」の言い換えと補足を施す。「見かけ倒し」は、信念に入った「亀裂」という比喩からもわかるように、「過去自体」という信念は、「後の祭りを祈る」という現実の行為によって、裏切られていることを示している。「実践してきた道」とは、私たちが実生活のなかで実践してきた過去のとらえ方、裁判のような、過去についてのもめごとを解決しようとするときのやり方、すなわち、（真理条件に基づく）過去の合意形成＝過去制作というものだった。

【解答例】「過去は、すでに決定しており、現在からは手が届かないという考えは、決定済みと思われる時点でなお祈るという矛盾した行為が見られることから考えても、確かなものとはいえない。そういった過去の実在という考えから離れ、私たちが実生活のなかで実践してきた過去のとらえ方を再確認することによって、どのような別の考え方ができるのか、考えたいということ。」

※解答例の文末にも注意。「どんな考え方ができるのかということ。」でもいいように思うだろうが、文脈は、「どんな考え方ができるのか、私の考えを示していこう」という問題提起の流れなので、その趣意を入れてみたいところ。

3　「それが物自体とか過去自体といった妄想にほかならない」とあるが、なぜ「妄想」であるのか。

たどってきたところなので、なんとなくわかるだろうが、「書く」ときにはどうするか。

その1。**☆なぜ→「妄想」って？と問い直す。**直後の「過去自体とは（カントが強調したように、物自体と同様に）経験的には考えることができず、したがって想像することもできない、それゆえただ**妄想**することができるだけのものである」

「過去自体」＝経験不能、想像不能。ここで、想像と妄想は区別されている。想像とは、ここでは何らかの根拠に基づいて思い浮かべること。「過去」を思い浮かべることはできる。それは、想起経験という具体的な経験である。それは私の記憶に基づく過去のイメージ。あるのはそれだけで、その個々の具体的な想起経験をつないで過去物語を制作していくところにしか「過去」はない。一方、人間が関係しない純粋な「過去自体」なるものは、思い浮かべることはできない。妄想とは、誇大妄想とか被害妄想というように、事実（経験）に基づかない観念的な信念を指す。

その2。**☆指示内容の補填。**「それ」の指す内容は、直前「（過去と呼ばれているものは制度化され公式化された過去物語りなのに、）過去があたかも人間とは無関係に実在して、時折われわれにその姿をかいまみさせる、といった錯覚を生むこと」。

これらを整理して、

・妄想とは、経験に基づかない錯覚、思い込みである。

・錯覚の内容は、過去があたかも人間とは無関係に実在すると考えることである。

・過去とは、ほんとうは想起経験によって制作される過去物語である。

これらのパーツを組み立てる。なぜ妄想か？に対しての答えだから、「それは、錯覚だから。」が押さえ。

【解答例】「過去は、想起によって捉えるしかなく、その個々の想起経験に基づいて人間が過去についての物語を制作しているので、過去が人間とは無関係に実在すると考えることは、経験に基づかない錯覚であるといえるから。」